



令和3年度

国立近現代建築資料館活動報告

令和3年度 国立近現代建築資料館 活動報告

Annual Activity Report of NAMA, 2021 (Reiwa 3) fiscal year

文化庁国立近現代建築資料館

I. 資料の調査・保管等

(カッコ番号は各資料の資料群番号)

1. 各資料の作業

各資料について、次のとおり調査から保管までの業務(資料調査、資料受入、契約解約、返却、資料整理・研究、目録作成、デジタル撮影、燻蒸、修理、資料利用等)を行った。

(1) 坂倉準三建築設計資料

■ 概要

資料整理については、昨年度からの継続作業として、これまで作成した目録データの公開に向けて順次整備、書式の変更等作業を行った。また、他館での展示のための貸出しに伴い、一部資料の修理を行った。

■ 資料整理・目録作成

寄贈資料の内容を反映した階層構造に従い、公開用目録の作成手順を更新し、東京事務所図面資料の目録整備を進めた。

■ 資料の修理

高島屋資料館 TOKYO 及び岡本太郎美術館への資料貸出しに伴い、高島屋和歌山支店の図面資料2点(15-1015-21, 22)の修理を行った。また、寄贈資料に含まれる国立西洋美術館ポートフォリオ及び図面の調査を行った。

(4) 駒田知彦旧蔵坂倉準三関連資料

■ 資料の概要

坂倉事務所の元所員であった駒田氏所蔵の資料については、(1)坂倉準三建築設計資料から分割し、神奈川県立近代美術館関連資料とともに、ファイル目録作成を進めた。

(7) 村田豊建築設計資料

■ 資料整理・目録作成

図面目録は、アイテムレベルの目録を整理し、収蔵資料検索データベースへのデータ投入を行った。併せて図面以外の資料は、整理を終え、ファイルレベルの目録

を作成し、上記の図面目録の後ろにデータ投入できるよう準備を行った。また、資料整理を迅速に進めるため、図面以外の資料のうち、一ファイルを外部委託した。

■ 資料紹介

収蔵の経緯及び令和2年度までの整理結果については、飛田ちづる「村田豊建築設計資料整理報告」(『国立近現代建築資料館紀要』第1号)に概要を報告した。

■ 保存管理

図面以外の資料の保管箱に容器番号シールを貼り付け、目録にも容器番号を入力した。

■ デジタル化

ファイル番号34から48までの基本画像(400dpi)と閲覧用画像(200dpi)を作成した。

■ 参考情報

寄贈者によると、フランスのポンピドゥー・センターに寄贈された「富士グループパビリオン」が、同センター及び建築文化財博物館の“Aerodream”展に出陳されたとの情報があり、同展サイト上にて、同パビリオンの写真が主たる画像として掲載されていることを確認した。

(8) 吉阪隆正+U研究室建築設計資料

■ 目録作成

追加で目録作成の必要な資料があることが判明した。

■ 貸出

東京都現代美術館で開催の「吉阪隆正展 ひげから地球へ、パノラマ」(R4.3.19～6.19)に当館収蔵資料78点を貸し出した(別にデータのための貸出37点)。貸出資料が多数にのぼるため、当館は「特別協力」として広報資料等に特記されている。

■ 修理

上記展覧会への貸出準備として、貸出予定の資料のうち17点を修理した。

■ 保存管理

A2判以下の図面については、収蔵場所の都合から平箱へ入れ替え、管理番号シールを貼り付けた。同時に、収蔵場所も移動し、管理場所表を作成した。

(10) 大高正人建築設計資料

■ 目録作成

図面筒1番から39番まで、順次フラットニング、採番、目録作成で実施した。これとは別に「自動車労連」から同建築の一連の図面の画像提供依頼あり、これらについてもフラットニング、採番、目録を作成した。

■ デジタル化

自動車労連会館関連図面のデジタル化を実施した。

■ 保存管理

保存容器へ管理番号シールを貼り付けた。同時に管理場所表を作成した。また、アパチュアカードには、可能な限り定期的に、ガス吸着シートの交換を実施した。さらに図面については、大きさに合わせて収蔵場所を移動した。

(13) 渡辺仁資料

■ 保存管理

資料の形態にあわせて入れ替えた。同時に、フォンド番号未記載の資料には、フォンド番号を記載した。

■ 目録

既存目録を「最終目録」に書き換えた。

(15) 菊竹清訓建築設計資料

■ 概要

寄贈された1960年代及び慰霊碑関連の図面資料について、資料整理を継続して進めるとともに、前年度に借用した1970年代前半の図面資料及び慰霊碑関連の文書等資料について、賃借契約を締結し、寄贈手続きに向けた資料の確認作業を継続した。

■ 委託事業等

当該資料の整理をより効率的かつ適切に行うため、資料整理にあたっては、1970年代図面資料については、有限会社ナスカへ委託し、慰霊碑関連資料については、令和2年度に引き続き、昭和女子大戸田穰氏へ資料整理協力を依頼した。

さらに、今後の菊竹清訓資料の収集計画策定のため、現状調査業務を東京理科大に委託した。委託の概要は、資料の総体を把握し、具体的な収集計画を検討するため、これまでの展覧会に伴う資料調査及び資料の現状をまとめ、課題を整理するものである。

■ 資料整理

寄贈済み資料については、閲覧等利用の申請があったものから目録を作成し、デジタル化作業を実施した。借用資料については、令和2年度に引き続き、フラットニング及び資料番号の付与を中心に整理作業を進めた。

なお、慰霊碑関連資料についても、図面資料を中心にフラットニング、資料番号付与、目録作成作業を進めた。

■ 菊竹清訓建築資料のアーカイブズ構築のための

アドバイザリー・コミッティー

3月7日にアドバイザリー・コミッティーを2年ぶりに対面（一部 Zoom）で開催した。菊竹資料の総量やこれまでの資料整理の状況、今年度の資料整理内容と資料の活用状況の報告に加えて、資料閲覧のために当館が作成したデータベースを紹介し、今後の菊竹資料の継承に向けた意見交換を行った。

■ デジタル化

寄贈された資料のうち、利用申請や収蔵品展等を使用予定の井上邸、こどもの国林間学校等、整理された資料の一部からデジタル化を先行して行った。

(16) 川添登資料

■ 資料確認・整理

令和2年度から継続して、贈与契約に向けて段ボール箱に収納された資料の整理、目録作成等を進めた。

(19) 平田重雄資料

■ 保存管理

書籍の一部を、図書整理にあわせ、図書としての登録を実施した。

(20) 岸田日出刀資料

■ 資料整理

大正時代の洋行、及び広東、台湾視察の日記帳について翻刻の下訳を行った。

■ 保存、管理

資料の形態、大きさを考慮し、容器を入れ替え、容器に管理番号シールを貼り付けた。

■ 資料紹介

昭和35（1960）年東京オリンピック施設委員長としての視察旅行時の日記帳の翻刻を実施し、内容の一部を、飛田ちづる「岸田日出刀の1964年東京オリンピック大会施設委員長としての視察時の日記帳に関する概要報告」（『国立近現代建築資料館紀要』第1号）で紹介した。

(23) 高橋訥一・第一工房資料

■ 資料調査

第2期の贈与契約に向け、アイテム番号の付与及びファイル目録作成を進めた。

■ 資料整理・目録作成

第1期贈与契約分資料について、アイテム目録の作成、デジタル化を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

(24) 前川國男建築設計資料

■ 資料整理

寄贈資料について、前年度からの目録作成作業を継続して進めた。

(25) 原広司+アトリエ・ファイ建築設計資料

■ 資料調査・目録作成

目録作成を3,500件程度、デジタル化を1,800件程度進めた。令和4年秋に開催予定の原広司展に出陳する資料を優先的に作業対象とした。

■ 第二次寄贈に向けた手続き

令和4年3月1日付けの借用依頼に基づき、3月3日に資料館に204件の資料を搬入した。資料内容はスケッチ・図面等。令和4年度以降に第2回贈与契約に向けて資料調査及び員数確認を行う予定である。

(26) ブルーノ・タウト関連資料

■ 資料調査・目録作成資料

それぞれにアイテム番号を付与し、一部について、アイテム目録作成を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

(27) ヴァスムート社所有吉田著作関連資料

■ 資料調査・目録作成

資料整理及び目録作成をほぼ終了し、令和4年度にとりまとめ作業を進める。また、一部資料のデジタル化を進めた。

■ 保存・保管

資料の形態、大きさを考慮し、包材及び容器に入れ替えた。

(29) 篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料

■ 資料の概要調査

資料の内容及び数量の調査・確認をし、返却資料を含めデジタル化を進めた。

■ 資料受入れに向けた手続き

令和4年2月7日開催の第17回収集小委員会で、資料の詳細を説明し、収集相当の判断を得た。これを受けて令和4年3月23日開催の運営員会に報告し、審議の結果、資料受入れについて承認された。

2. 新規受入資料の概要

(23) 高橋觥一・第一工房資料

高橋觥一は、1924年中国青島市生まれ、1949年東京大学第二工学部建築学科卒業、通信省営繕部設計課勤務、1956年 武蔵工業大学建築学科助教授、1960年第一工房創立、1967年 大阪芸術大学主任教授就任(1995年退職)し、2016年 死去した。二度にわたる日本建築学会受賞など多くの受賞歴がある建築家である。本資料群は、第一工房において作成された建築設計図書、写真、スケッチ等の資料からなる。

資料は全て第一工房を出所とするもので、個人著作並びに法人著作の著作権者は高橋觥一氏の子息であり、株式会社第一工房代表取締役の高橋真氏に属する。

第一工房の発足当初から、事務所解散直前までの期間の資料が含まれる。代表作である大阪芸術大学のコンペ及び実施図面をはじめ、DOCOMOMO に選定された佐賀県立博物館などの60、70年代の作品から後期の作品まで、一連の建築作品の設計図書が含まれる。

本年度は、第1期として、佐賀県立博物館、大阪芸術大学塚本記念館を含むコア作品、141ファイル9,101点の贈与契約を行った。

Ⅱ. 展示・教育普及

1. 展覧会

令和3年度は、新型コロナウイルス感染拡大による影響から1年間延期となっていた丹下健三展「丹下健三

1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」を開催した。また、資料館収蔵資料を活用した収蔵品展として「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が物語る名作住宅(1940-1975)」を開催した。並行して、令和4年度の展覧会2件の企画立案を行い、運営委員会及び企画小委員会の了承を得た。

(1) 「丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」

■ 開催概要

タイトル

丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万

博まで

TANGE KENZO 1938–1970 From Pre-war period to
Olympic Games and World Expo

趣旨

文化庁国立近現代建築資料館では、2014年～2016年度の3年間にわたり建築家・丹下健三（1913–2005）に関する建築資料の所在調査を実施してきました。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会、建築・デザイン分野における大規模催事（ドコモモ世界大会、日本建築学会大会など）の開催を控え、これまでの建築家・丹下健三に関する建築資料調査の成果を活用した展覧会を開催し、我が国の近現代建築とその関連資料に対する理解増進に資することを目的としています。

この展覧会は日本の戦後復興に貢献した丹下を多角的に総括する東京で初めての回顧展となり、高知県立美術館協力のもとに石元泰博撮影写真、本邦初公開となるスケッチや多数資料を揃え、丹下の建築、都市、国土を構想する力の根源を探る展示内容となっています。

開催期間 令和3年7月21日（水）～10月10日（日）

会場 文化庁 国立近現代建築資料館

主催 文化庁

協力 株式会社丹下都市建築設計、内田道子、
公益財団法人東京都公園協会、
独立行政法人日本芸術文化振興財団、
ワールド・モニュメント財団、
アメリカン・エクスプレス、
一般社団法人 DOCOMOMO Japan、
高知県立美術館

ゲストキュレーター 豊川斎赫（千葉大学准教授）

制作協力 国立大学法人千葉大学
勝原基貴（千葉大学特任研究員）

企画 文化庁 国立近現代建築資料館

館内担当者 加藤道夫（当館主任建築資料調査官・
東京大学名誉教授）
木下紗耶子（当館研究補佐員）
小池周子（当館研究補佐員）

アートディレクション・デザイン 寺山祐策事務所
特設ウェブサイト（デザイン） 大田暁雄
特設ウェブサイト（翻訳） マチダ・ゲン、
株式会社フレーズクレーズ

会場設営 株式会社第一広房 TOKYO

展示輸送 TERRADA ART ASSIST 株式会社

映像編集 岡篤郎

資料修理 有限会社東京修理保存センター

美術照明 竹下誠司（合同会社サムサラ）

翻訳 株式会社フレーズクレーズ

音声ガイド 株式会社ケイカ

模型制作 諏佐遥也（ZOUZUO MODEL）

■ 会場構成

[展覧会構成]

- 第一章：戦争と平和
- 第二章：近代と伝統
- 第三章：戦後民主主義と庁舎建築
- 第四章：大空間への挑戦
- 第五章：高度経済成長と情報化社会への応答
- 第六章：5つのキーワードの統合

■ 展覧会特設ウェブサイト

展覧会基本情報および概要を紹介。会期中に、展覧会紹介映像、シンポジウム・ギャラリートーク映像を順次公開。

■ グラフィックサイン・フライヤー・図録

体裁・部数 ポスター：B2判 片面カラー 600部
チラシ：A3判 両面カラー、
二つ折り加工 30,000部
図録：B5横 82頁、初版 3,000部
第二版 1,500部

デザイン 寺山祐策事務所

■ シンポジウム

開催日 令和3年9月9日（木）

会場 国立近現代建築資料館

公開 展覧会特設ウェブサイトで動画公開

プログラム

キーノートスピーチ

「丹下健三とル・コルビュジェの間で」

加藤道夫（国立近現代建築資料館主任建築資料
調査官／東京大学名誉教授）

講演

「時間のなかの丹下健三：20世紀と21世紀の間で」

加藤耕一（東京大学大学院教授）

「丹下健三をいかに未来につなぐのか」

DOCOMOMO の活動を通して 共感力と想像
力を喚起すること」

渡邊研司（DOCOMOMO Japan 代表理事／
東海大学教授）

ギャラリートーク

- ・広島平和記念公園及び資料館
- ・丹下研究室の作業風景
- ・卒業設計「芸術の館」
- ・香川県庁舎
- ・東京カテドラル聖マリア大聖堂
- ・山梨文化会館
- ・国立代々木競技場の周辺環境とその歴史的文脈
- ・総括

翻訳

長谷川香（東京芸術大学講師）

ヴォイシュツェ、ロバート（国立西洋美術館リサーチフェロー）

■ 音声ガイド

概要 全16のプログラム（計25分程度）を各自のスマートフォンで視聴することができる。会場でQRコードを掲示した。（<https://tange-kenzo.keica.link>）
※現在は公開を終了）

プログラム

00 イントロダクション 01 慰霊祭に集う人々 02 広島計画 03 生い立ち、丹下研究室 04 戦没学徒記念若人の広場 05 芸術の館 06 成城の自邸 07 桂 08 旧東京都庁舎 09 香川県庁舎 10 愛媛県民館 11 東京カテドラル聖マリア大聖堂 12 山梨文化会館 13 日本列島の地域構造・図集 14 国立代々木競技場 15 代々木周辺地域模型

■ メディア掲載（抜粋）

WEB

- ・Casa BRUTUS オンライン：青野尚子「日本建築の巨人、丹下健三の足跡を追う展覧会。」（<https://casabrutus.com/architecture/193703>）
- ・artscape Japan James Lambiasi. “Kenzo Tange: Architect of a New Modern Era in Japan”（https://artscape.jp/artscape/eng/focus/2110_02.html）

新聞

- ・大西若人「都市とともに 今も生きる丹下建築」『朝日新聞』2021年9月21日（夕刊）、3頁
- ・森田陸「記者ノート 丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで 文化的価値の検証を重ねる意義」『読売新聞』、2021年10月5日、29頁
- ・渡辺真希「都内で丹下健三展 前半生 建築の足跡 山梨文化会館も紹介」『山梨日日新聞』、2021年10

月7日

雑誌

- ・勝原基貴「「丹下健三 1938-1970：戦前からオリンピック・万博まで」展」『docomomo 会報』第30号、P15、2021年8月15日号
- ・保坂健二郎「丹下健三展の楽しみ方」『すばる』集英社、2021年10月号、pp.296-297

テレビ

- ・NHK 日曜美術館アートシーン、2021年9月19日放映

■ 来場者数（7月21日～10月10日）

来場者総数 14,179人

（合同庁舎正門：5,407人、旧岩崎庭園：8,772人）

一日平均来場者数 172.9人（82日間）

(2)「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が物語る名作住宅 1940-1975」

■ 開催概要

タイトル

令和3年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が物語る名作住宅1940-1975

Designing Home: Masterpiece Houses from NAMA's Collection 1940-1975

趣旨

コロナ禍において在宅勤務の推進、家族生活の変化が生じ、「住まい」に対する考え方自体にも変化の兆しが見られ始めています。私達の住まいの考え方は、戦後復興期から1970年代初めの高度成長期までの住宅に関する様々な試みを土台として形成されました。都市への人口集中、持ち家願望、核家族化の進行、モダンでお洒落な生活空間の希求といった大きな社会状況の変化に応えるべく、様々な「住まい」が構想されました。それらを土台として、「住まい」のデザインは1970年代後半以降に多様性を伴って高度な発展を遂げ、今日では、日本の建築文化を支える重要なフィールドとなっています。本展覧会では、この「住まい」の構想の土台に焦点を当てます。当資料館の収蔵資料より、戦中および戦後復興期から1970年代半ばまでの住まいの構想資料を取り上げ、日本の住宅の試行と発展をわかりやすく、かつ、生き生きと蘇らせることを目指します。

主催 文化庁

協力 公益財団法人東京都公園協会

会場 文化庁国立近現代建築資料館
(東京都文京区湯島4-6-15 湯島地方合同庁舎内)

会期 2021年12月14日(火)～2022年3月13日(日)
10:00-16:30 休館日: 毎週月曜日
*ただし1月10日(月・祝)は開館
2021年12月27日(月)～2022年1月4日(火)、
1月11日(火)

企画 文化庁国立近現代建築資料館
小林克弘／主任建築資料調査官
小池周子／研究補佐員
木下紗耶子／研究補佐員
加藤直子／研究補佐員
飛田ちづる／研究補佐員
寺内朋子／研究補佐員

翻訳 坂本和子(英語)、朴玉順(韓国語)、
Eric Yu(中国語)

アートディレクション 加藤弾(Gaim Graphics)、
清武優子

会場設営 株式会社 芸宣、トップアート鎌倉、
竹下誠司(合同会社サムサラ)

■会場構成

1章：木造の伝統とモダニズムの融合

日本の伝統木造の表現に、近現代建築のデザイン要素(骨組み構造、ピロティ、屋上庭園、自由な平面、吹抜け、単純な幾何学形態など)を取り入れるという課題への応答を見る。

前川國男 | 自邸(大高正人による図面): 1942、坂倉準三 | 龍村邸: 1943、丹下健三 | 自邸: 1953、
前川國男 | NHK 富士見ヶ丘クラブ: 1954、岸田日出刀 | 衆議院議長公邸: 1961、高橋訥一 | 高垣邸: 1962

2章：量産化と集合化

戦後日本の住宅不足を背景に飛躍的な研鑽が積み重ねられた様々な住まいの形。時代背景が色濃く見える試みの数々。現代における日本の「住宅」の骨格を作り上げた軌跡を探る。

前川國男 | 上海華興商業銀行綜合社宅: 1939、坂倉準三 | 戦争組立住宅: 1942、前川國男 | プレモス・シリーズ: 1948、大高正人 | 坂出市人工土地: 1962

3章：都市化と住空間の創造

1964年の東京オリンピック前に大きく変化した日本の都市、そしてライフスタイル。その急激な変化に対応すべく構想された「住まい」の多様な模索を読み

解く。

菊竹清訓 | スカイハウス: 1958～、菊竹清訓 | 井上邸: 1955、吉阪隆正 | 自邸: 1955、坂倉準三 | 正面のない家(仁木邸): 1962、原広司 | 自邸: 1974

本展では、一部の展示を一ヶ月ごとに替えることで、より多くの貴重資料の特別展示(マンスリー・フィーチャー)を行った。

2021年12月14日(火)～2022年1月16日(日)

坂倉準三関連資料:

戦争組立住宅、ユニットプランの住宅、正面のない家(平野邸)、坂倉 OB 北村脩一氏オーラルヒストリー、初公開写真資料のスライドショー(12分)

2022年1月18日(火)～2月13日(日)

前川國男関連資料:

プレモス、華興商業銀行綜合社宅、華興商業銀行綜合社宅の地鎮祭から竣工までを収めたアルバムの全ページスライドショー(7分)

2022年2月15日(火)～3月13日(日)

菊竹清訓関連資料:

スカイハウス、井上邸、方形プランの家、菊竹清訓インタビュー(13分)

マンスリーでは、特集に応じ、展示物のほかスライドショー、動画も変えて展示を行っている。通し展示及びマンスリー展示では、キャプションの色を変え、訪問者への理解訴求を目指した。

■グラフィックデザイン、フライヤー、図録

体裁・部数 ポスター: B2判 片面カラー 300部
フライヤー: A4判 両面カラー 10,000部
図録: B5横・82ページ 3,000部

デザイン 加藤弾(Gaim Graphics)、

コーディネーション 清武優子

■メディア掲載

新聞

- ・毎日新聞 2021年12月27日夕刊
- ・読売新聞 2022年1月14日朝刊

雑誌

- ・住む 2022年冬号: P146
- ・住宅建築 2022年2月号: P136
- ・ディテール 2022年1月号: PR3
- ・宝島社 In Red 2022年2月号: P95

- ・新建築 住宅特集 2022年2月号：P156
- ・新建築 2022年2月号：P21
- ・Hanako 2022年3月号：P121
- ・月刊「東京人」編集室 2022年3月号：P141
- ・建築画報 2022年2月号
- ・日経アーキテクチャー 2022年2月10日号：P90

WEB

- ・Tokyo Art Beat
- ・JDN
- ・KENCHIKU
- ・新建築 online

■ 来場者数

来場者総数 3,700人

(合同庁舎正門：2,384人、旧岩崎庭園：1,316人)

一日平均来場者数 52.1人(71日間)

* 岩崎庭園は2022年1月11日より感染拡大防止対策のため休園

(3) 展覧会準備

令和4年度に向けて、下記の2件の展覧会の企画立案を進めた。以下、現時点での企画書概要を掲載する。

① 令和4年度収蔵品展

「こどもの国」のデザイナー—自然・未来・メタボリズム建築— [併設] 新規収蔵資料紹介

併設：新規収蔵資料紹介

- ・岸田日出刀建築資料
- ・駒田知彦旧蔵坂倉準三関連資料
- ・村田豊建築設計資料
- ・木村俊彦構造設計資料
- ・角田栄資料
- ・ヴァスマート社旧蔵吉田鉄郎著作資料
- ・篠井家旧蔵吉田鉄郎城端郵便局資料

② 原広司 有孔体の世界

— モデルから建築へ、そして都市・宇宙へ — (仮)

2. 資料提供

(1) 現物(貸出先：貸出資料 用途)

- ・鎌倉文華館：坂倉準三(鎌倉近代美術館) 14点
展覧会「ひらかれたミュージアム」
- ・高島屋資料館：坂倉準三(新宿西口広場・小田急他) 196点
展覧会「建築家・坂倉準三と高島屋の戦後復興—「輝

く都市」をめざして—」

- ・岡本太郎美術館：坂倉準三(岡本太郎邸 立面図他) 51点
展覧会「戦後デザイン運動の原点——デザインコミッティーの人々とその軌跡」
- ・東京都現代美術館：吉阪隆正(吉阪自邸 立面図他) 78点
展覧会「吉阪隆正展 ひげから地球へ、パノラマみる」

(2) 画像(貸出先：貸出資料 用途)

- ・個人：丹下マイクロ資料(静岡新聞東京支社) 出版物への掲載(書名：UN/SUSTAINED) 6点
- ・団体：大高(映像資料・図面：三春町民体育館) 記念連続web シンポジウムにて映像の放映1点
- ・企業：大高(プロフィール写真) 株式会社広域高速ネット二九六「千葉県の優れた建築物を紹介する4K番組企画」にて放映3点
- ・個人：坂倉(神奈川県立近代美術館) 多言語にわたる出版物への掲載1点
- ・個人：公立大学法人静岡文化芸術大学デザイン学部デザイン学科建築設計演習I(デザイン専門科目)の授業資料として9分放映1点
- ・団体：大高(多摩ニュータウン自然地形案建物配置計画図) 2点
- ・個人：村田豊(長生きする家) 学術研究論文への掲載3点
- ・企業：吉阪資料(日本館図面) 日本語版・英語版『ヴェネチア・ビエンナーレと日本の美術家』(仮称)(編集：独立行政法人国際交流基金, 出版：平凡社)への図版掲載のため2点
- ・企業：前川國男設計(プレモス7)『クリティカル・ワード現代建築』掲載1点
- ・個人：大高正人(自動車労連会館に係る図面資料) 全日本海員組合本部会館に関する調査研究 6点
- ・団体：坂倉準三(近鉄奈良ターミナルビル) 教育講座「奈良公園周辺近代・近現代建築巡り」において、受講者への配布資料に掲載2点
- ・企業：大高正人(都心臨海部再開発計画78～90) 広報誌『BM』vol.64 中面記事に掲載2点
- ・企業：坂倉準三(新宿西口駅本屋ビル・新宿西口広場および地下駐車場) NHK放送番組名『すこぶるアガるビル』番組放映のため3点
- ・団体：大高正人(南多摩ニュータウン自然地形案) パルテノン多摩ミュージアムのリニューアルにあたり、常設パネル内に掲載2点

(3) 資料閲覧及び複写の提供

資料閲覧及び複写の提供実績の概要は、以下のとおりである。

ア. 閲覧実施件数及び閲覧点数の実績

実施件数：17件

閲覧に供した資料点数：7,936点

資料群別の実施件数

- ・坂倉準三建築設計資料：7件
- ・前川國男建築設計資料：1件
- ・吉阪隆正建築設計資料：2件
- ・菊竹清訓建築設計資料：2件
- ・吉田鉄郎建築設計資料：1件
- ・大高正人建築設計資料：3件
- ・村田豊建築設計資料：1件

イ. 複写の提供実績

提供件数：2件

提供点数：119点

3. 第3回近現代建築アーカイブズ講習会【中止】

近現代の建築資料を所蔵する組織の学芸担当者等を対象とし、近現代建築資料における収集、整理、保存及び利用等に関する必要な専門的知識と技能の習得を目的として令和元年、2年と開催してきたが、令和3年度は新型コロナウイルス感染症流行状況の予測が困難であったため、開催を中止した。

4. 近現代建築アーカイブズ研修オンライン教材制作

講習会中止の代替手段として、インターネットで公開する講義形式の研修教材番組2本を制作した。

(1) 「アーカイブズの基礎」

(講師：保坂裕興学習院大学大学院教授)

(2) 「近現代建築資料保存の意義と実践」

(講師：田中正之国立西洋美術館長)

令和4年度にインターネット上で公開し、基礎的な教材として活用する予定である。

5. 『国立近現代建築資料館紀要』第1号刊行

当館の収蔵資料に関する情報と、館職員や協力者の調査研究成果の公開について、令和2年度から公開方法を検討してきたが、研究論文や資料紹介等を掲載する『国立近現代建築資料館紀要』として令和3年9月にオンラインと印刷(A4判、64ページ)の両方で刊行した(年1回刊行予定)。逐次刊行物としてISSNを取得した(ISSN 2436-6757〔オンライン〕ISSN 2436-6765〔印刷〕)。内容は以下のとおりである。

・論文

国立西洋美術館のポートフォリオについての比較研究 加藤道夫、加藤直子、寺内朋子

日本の近代建築を支えた構造家たち 竹内徹、浜田英明

・資料紹介

国立近現代建築資料館が所蔵するル・コルビュジエ設計の国立西洋美術館の図面群について 加藤道夫、加藤直子、寺内朋子

村田豊建築設計資料整理報告 飛田ちづる

岸田日出刀の1964年東京オリンピック大会施設委員長としての視察時の日記帳に関する概要報告 飛田ちづる

・プロジェクト

収蔵品展の意図とプロセス 令和2年度収蔵品展『ミュージアム1940年代-1980年代：始原からの軌跡』より 遠藤康一、木下紗耶子、川向正人

・年次報告

令和2年度国立近現代建築資料館活動報告

6. 収蔵資料検索システムの公開・運用

令和3年6月に収蔵資料検索システム(<https://db.nama.bunka.go.jp>)を公開した。収蔵する資料群の概要公開(16資料群)、ファイル(図面筒、図面フォルダ等)レベルまでの目録公開(5資料群)、アイテム(個別の図面や資料)レベルまでの目録公開(6資料群)、サムネイル画像の公開(一部：3資料群)を行っている。システムの管理は(株)VVVに委託した。

7. 資料のデジタル化

令和2年度から、一貫した仕様でのデジタル化作業をとりまとめて実施している。令和3年度は以下の資料4,262点について、スキャナによる高精細デジタル化を行った。

07_村田豊資料 547点

10_大高正人資料 1,346点

15_菊竹清訓資料 832点

20_岸田日出刀資料 82点

23_高橋航一・第一工房資料 464点

24_前川國男資料 179点

25_原広司資料 812点

Ⅲ. 情報収集

1. オーラルヒストリー

令和3年度の作成実績なし。

Ⅳ. 調査研究等

我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査

1. 実施概要

1990年代以降は建築資料の電子化が進み、このような電子化された建築資料をいかにアーカイブとして構築するか、そして適切に保管、活用していくかといった方策を見いだすことが今後の課題として認識されている。

本調査は他の建築資料よりもその資料的特性等から、先行して電子化が進んだ構造資料を対象として、これまで資料館が行ってきた3か年の構造家の概要資料調査の成果をふまえつつ、複数の存命建築家の資料について調査し、アーカイブ構築のための課題を整理し、ネットワーク化を含む構造資料の電子化継承にかかわるさまざまな可能性について検討することを目的とした。本年度は、昨年の成果を受けて次のとおり調査を実施し、その成果を「我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査」報告書としてとりまとめた。

2. 実施の記録

次のとおりワーキンググループによる調査を実施し、その成果を「我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査」報告書としてとりまとめた。

主査：竹内徹（日本構造家倶楽部）

委員：伊藤潤一郎、佐々木睦朗、金田勝徳、金箱温春、多田脩二、中田捷夫、原田公明、満田衛資、森部康司（日本構造家倶楽部）、小澤雄樹（芝浦工業大学）、川口健一（東京大学）、安藤顕祐（日建設計）、浜田英明、藤本貴子（法政大学）

顧問：難波和彦

協力：加藤道夫、加藤直子（資料館）

第1回：令和3年10月21日（木）10時から12時

場所：オンライン開催

打ち合わせ内容：前年度の活動概要報告、今年度業

務の概要説明および実施方法の確認等、資料館から加藤直子補佐が陪席

第2回：令和4年1月21日（金）、10時から12時

場所：オンライン開催

内容：レクチャー（第1回）を実施

講師：記憶の森研究所・齋藤柳子

題目：「建築のレコード・マネジメントー存命構造家の電子資料の継承をめざしてー」＋質疑応答、その後今年度業務の進捗状況の確認、資料館から加藤道夫主任が陪席

レクチャー概要：アーカイブズの定義と有用性、レコード・マネジメントとアーカイブズの違い、建築におけるレコード・マネジメント、デジタル時代のレコード・マネジメント等について解説。建築分野におけるレコード・マネジメントの具体的な方策として、フォルダ名・ファイル名の標準化（日付／固有名詞／内容形態）、業務フローに基づいたシリーズ別フォルダにデータを格納することなどが挙げられた。

第3回：令和4年3月4日（金）、13時から15時

場所：オンライン開催

内容：レクチャー（第2回）を実施

講師：日建設計・千葉太郎氏

題目：プロジェクト情報のデータ保管と情報共有＋質疑応答、資料館から加藤道夫主任、加藤直子補佐が陪席

レクチャー概要：日建設計設計部門統括室が保管対象とする書類の内容、社内システムの概要、設計図書の収集・保存・公開の流れ、保管している設計図書そのフォルダ構成についての解説がされた。システムの概要、設計図書の収集・保存・公開の流れ、保管している設計図書そのフォルダ構成についての解説がされた。

第4回：令和4年3月9日（水）13時から15時

場所：オンライン開催

内容：レクチャー（第3回）を実施

講師：弁護士・桑野雄一郎氏

題目：資料継承に関わる著作権について＋質疑応答、資料館から加藤道夫主任が陪席

レクチャー概要：著作権の概要、著作者との著作権者が異なる場合（法人著作、映画の著作物）、構作家の資料に関して考えられる著作権、資料継承に

伴って考えられる利用方法と該当する著作権について、資料継承に関する毛役について、解説いただいた。継承資料を扱う際には、著作物に該当するという前提で取り組むことがよいこと、著作権には独立した複数の権利が含まれるため、利用を想定して該当する権利を考える必要があることなどが注意点として挙げられた。

第5回：令和4年3月16日（水）17時から19時

場所：オンライン開催

打ち合わせ内容：最終報告書（案）の提示と確認

3. 調査結果概要

本年度の調査の結果、下記の点が明らかになった。

1) 構造家本人が逝去した場合はもちろん、存命の場合でも長年に渡り蓄積されたプロジェクトデータを後から体系的に整理するのは容易ではない。普段からデジタルデータを体系的にファイリングし、プロジェクト終了後はそのままアーカイブ化できるようなシステム構築が求められる。

2) 大手組織設計事務所では、デジタル化した構造資料（映像、図面、CADデータ、構造計算書等）をプロジェクト段階より分類して共有データとして管理し、担当者に依らずアクセスできるように保存している場合が多い。特に映像データなどは保存時に版權関係を整理し、組織名で自由に利用できる状態として保存することが重要となる。

3) 知的財産としての著作物には所有権と著作権があり、著作権はさらに複製権、上演権、頒布権などに分離しており、著作物として成立するものは何らかの作家性のあるもの（誰がやっても同じ結果になるアウトプットは対象とならない）に限定される場合が多い。普段から知的財産となる可能性があるものは分離して整理・管理しておくことが望ましい。

V. 委員会

1. 運営委員会

令和3年度委員

（◎は委員長、○は委員長代理、五十音順 敬称略）
加藤雅久（居住技術研究所主宰）、◎川向正人（東京理科大学名誉教授）、国広ジョージ（国土館大学教授）、隈研吾（東京大学特別教授・名誉教授）、○山名善之（東京理科大学教授）、六鹿正治（日本建築家協会会長）、渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター

教授）

開催状況

第18回：令和3年7月9日 ※ Web 会議

〔主な議題〕

- ・資料の受入について
- ・展覧会の開催について
 - ① 令和3年度収蔵品展
 - ② 令和4年度及び5年度の展覧会企画

第19回：4年3月23日 ※ Web 会議

〔主な議題〕

- ・資料の受入について
- ・展覧会の開催について
 - ① 令和4年度収蔵品展（案）
 - ② 令和4年度原広司展（案）
- ・今後の事業計画について

2. 小委員会

(1) 収集小委員会

令和3年度委員（◎は委員長、五十音順 敬称略）

加藤諭（東北大学准教授）、◎加藤雅久（居住技術研究所主宰）、角田真弓（東京大学技術専門職員）、藤木竜也（千葉工業大学准教授）、山崎幹泰（金沢工業大学教授）

開催状況

第16回：令和3年5月28日 ※ Web 会議

〔主な議題〕

- ・資料の受入れについて

第17回：令和4年2月7日 ※ Web 会議

〔主な議題〕

- ・資料の受入れについて
 - ① 吉田鉄郎城端郵便局資料

(2) 企画小委員会

令和3年度委員（◎は委員長、五十音順 敬称略）

太田泰人（美術史家）、大村理恵子（パナソニック汐留美術館学芸員）、◎国広ジョージ（国土館大学教授）、鈴木明（武蔵野美術大学教授）、前田尚武（京都市京セラ美術館企画推進ディレクター）

開催状況

第15回：令和3年5月31日

〔主な議題〕

- ・令和3年度収蔵品展企画案について

第16回：令和4年2月18日

〔主な議題〕

- ・令和4年度収蔵品展企画案について
- ・令和4年度原広司展企画案について

(3) 情報小委員会

令和3年度委員（◎は委員長、五十音順 敬称略）

後藤真（国立歴史民俗博物館准教授）、齋藤歩（京都大学総合博物館特定助教）、永崎研宣（人文情報学研究所主席研究員）、森本祥子（東京大学文書館准教授）、◎渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）

開催状況

第12回：令和4年2月28日

〔主な議題〕

- ・法律課題ワーキンググループ報告について

* 法律課題検討ワーキンググループの活動

資料公開に当たっての公開制限の原則について当館の方針を定めるため、平成30年度以降、情報小委員会に法律課題検討ワーキンググループを設けて検討を行ってきたが、令和3年度に開催した3回の会合を経て報告「国立近現代建築資料館における建築資料公開に関する方針と基準」を小委員会に報告し、活動を終了した。資料館では本報告の内容を基礎に、公開の運用を行うこととしている。

* ワーキンググループ構成員

【有識者】齋藤歩（京都大学総合博物館 特定助教）、戸田穰（昭和女子大学 准教授）、本間友（慶應義塾大学ミュージアム・コモンズ 専任講師）、三宅拓也（京都工芸繊維大学 助教）、山崎鯛介（東京工業大学 准教授）

【資料館】田良島哲、飛田ちづる、谷口友里（令和3年9月まで）

* 会合の開催状況（回数は前年度からの通算）

- | | | |
|-----|------------|---------|
| 第5回 | 令和3年6月21日 | オンライン開催 |
| 第6回 | 令和3年11月1日 | オンライン開催 |
| 第7回 | 令和3年12月21日 | オンライン開催 |

VI. 運営

1. 施設の充実

特段の記載事項なし。

2. 広報・広聴

(1) 資料館ウェブサイト

館の概要、収蔵資料、閲覧資料、閲覧等利用の案内、展覧会の開催、開館・閉館の予定等を告知するとともに、刊行物のデジタルファイル等を掲載した。なお、本年度は、感染症の流行で急な予定変更が多く生じたため、迅速にウェブサイトの告知をすることとした。

また、収蔵資料検索データベースを6月にWEB上に公開し、収蔵する16資料群の概要や、資料ごとに異なるが、ファイルレベル又はアイテムレベルでの目録公開及びサムネイル画像の公開を行った。

(2) 文京ミューズフェスタ2021（不参加）

文京ミューズマップ等により情報発信した。

(3) 上野文化の杜

上野文化の杜のポータルサイトで施設概要や展覧会の情報を発信した。

(4) アンケート調査

「丹下健三 1938－1970 戦前からオリンピック・万博まで」、「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が語る名作住宅（1940－1975）」の来館者に対して、展覧会の評価等に関するアンケート調査（任意）を実施した。

VII. 予算

令和3年度予算額 109,126千円

VIII. 組織

令和3年度職員名簿

館長	平山 直子（文化庁企画調整課長）
館長補佐	中島 充伸 （文化庁企画調整課課長補佐）
副館長	浅田 泰司（R3.6.30まで）
副館長	竹田 透（R3.7.1から）

【研究系】

主任建築資料調査官（収集担当）	加藤 道夫
主任建築資料調査官（企画担当）	小林 克弘
主任建築資料調査官（情報担当）	田良島 哲
研究補佐員	寺内 朋子
研究補佐員	加藤 直子
研究補佐員	木下 紗耶子

研究補佐員 小池 周子
 研究補佐員 飛田 ちづる
 事務補佐員 谷口 友理 (R3.9.30まで)
 事務補佐員 室田 恵美 (R4.1.1から)

【事務系】

事務室長 浅田 泰司 (R3.6.30まで)
 ※副館長兼務
 事務室長 竹田 透 (R3.7.1から)
 ※副館長兼務
 専門職 山口 俊浩 ※建築資料調査官兼務
 事務補佐員 酒口 ひろみ (R3.6.1から)

IX. 年譜

令和3(2021) 年

4月

平山直子館長(文化庁企画調整課長)就任(1日)

5月

国立近現代建築資料館運営委員会収集小委員会(第16回)(28日) ※ Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会企画小委員会(第15回)(31日) ※ Web 会議

7月

国立近現代建築資料館運営委員会(第18回)(9日)
 ※ Web 会議

「丹下健三 1938-1970 戦前からオリンピック・万博まで」(21日～10月10日)

「高橋航一・第一工房資料」第1回贈与契約締結(27日)

12月

「令和3年度収蔵品展「住まい」の構想 収蔵資料が物語る名作住宅(1940-1975)」(14日～令和4年3月13日)

令和4(2022) 年

2月

国立近現代建築資料館運営委員会収集小委員会(第17回)(7日) ※ Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会企画小委員会(第16回)(18日) ※ Web 会議

国立近現代建築資料館運営委員会情報小委員会(第12回)(28日) ※ Web 会議

3月

国立近現代建築資料館運営委員会(第19回)(23日)
 ※ Web 会議